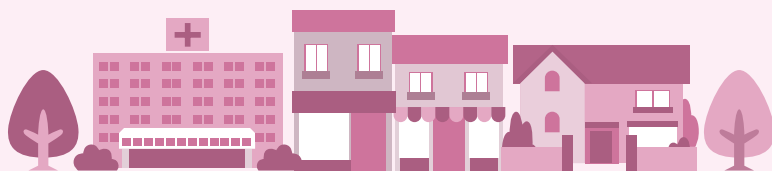


第 2 部

精神障害のある人の 暮らしと権利



私たちはどこで暮らすことが 幸せなのかなあ…

～退院支援・地域移行の現状と課題～

長い間、日本の精神科医療は入院中心の医療を行ってきました。近年は、利用者の住み慣れた地域や住みたいと望む地域での暮らしを大切にしながら、治療を外来中心で行う地域精神科医療が主流になっています。

精神科医療の問題点として長期入院や社会的入院があげられることがあります。国では「精神病床に関する検討会」をもち、その最終まとめを2004年8月に出しました。これによると、日本の精神病床は35.7万床、推定入院者数は32.1万人、うち1年以上入院している人は22.6万人で70.5%、さらにそのうち65歳以上の人々が46.2%となっています。一方、新規入院者も30万人以上おり、うち約85.0%が1年以内に退院しています。

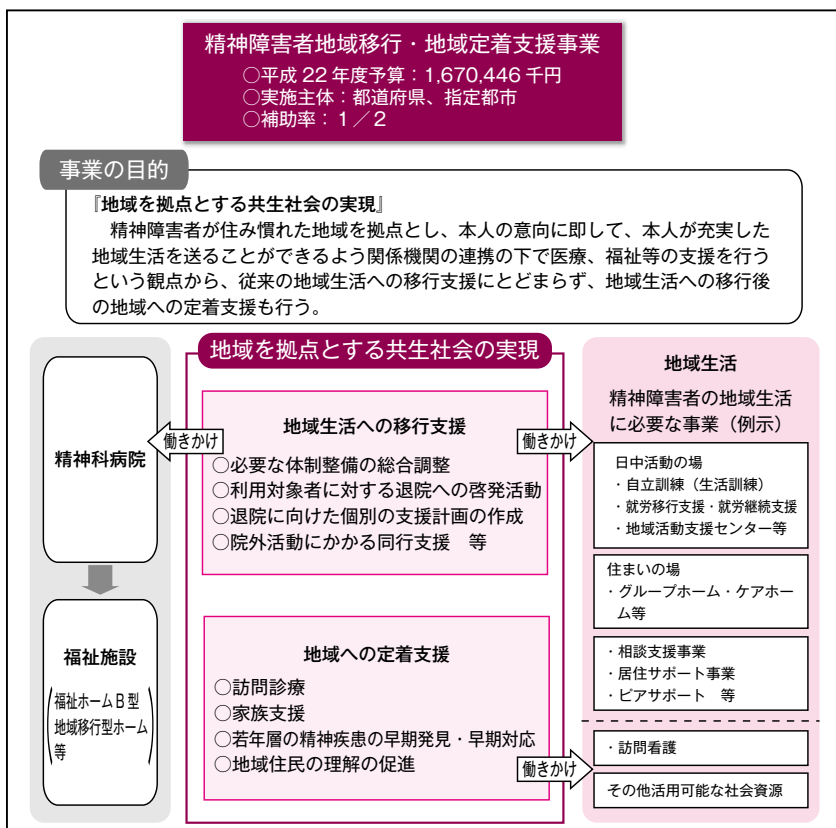
こうした中で、条件が整えば退院可能な人が約7万人いることがわかりました。この7万人のうち、入院期間が1年以内の人は約2万人（30%）、1年以上の人は約5万人（70%）となっています。1999年から2002年までの間に、退院可能な7万人の約半数が退院しました。しかし、毎年2.1万人の退院可能な人が新規発生していることが指摘されました。退院可能な約7万人の入院患者について、10年のうちに退院・社会復帰を目指す、このため、今後、さらに総合的な推進方策を検討することとなりました。

各地で従前より退院に向けた取り組みはもちろん行われていましたが、結果的には前述のように多くの社会的入院を生み出すことになってしまいました。退院に向けた取り組みは、大阪府で2000年に事業化され、「退院促進事

業」として2003年に国で事業化されました。現在は「精神障害者地域移行・地域定着支援事業」となっています。これを受けて、各地で地域移行支援が行われています。

退院先としては、以前から住んでいる自宅（家族と同居あるいは単身）、新たな住居（単身アパート、マンション、公営住宅等）、生活訓練施設や福祉ホーム、グループホーム等の社会復帰関連施設への入所、そのほか、救護施設や更生施設の利用やインフォーマルな共同住居なども考えられます。

(図) 厚生労働省による地域移行・地域定着支援事業の概要（平成 22 年度）



出典：厚生労働省ホームページ

事例

退院支援事業を利用したスムゾーさんの 地域生活までの道のり

スムゾーさんは、ある精神科病院に17年間入院していました。以前働いていたときに統合失調症になり、入院しましたが2年ぐらいで落ち着きました。しかし退院については家族からの強い反対があり、何度か退院のチャンスがありましたが、結局数年が過ぎてしまいました。スムゾーさんは開放病棟の療養病棟にいたため、外出も自由でしたし、友人も同じ病棟にたくさんいたので、このまま病院にいてもいいやと思うようになっていました。そんなある日、新しく病院に来た精神保健福祉士が、退院促進プログラムを始めるので出てみませんか、と誘ってくれました。スムゾーさんは、もう一生病院にいてもいいと思っていたので断ったのですが、熱心に誘われ、しかたなく退院支援プログラムに出してみました。

2回目のプログラムで、以前入院していた人が、一人暮らしをして3年になり、毎日夜は趣味の将棋に出かけていることを話してくれました。同じように以前から顔見知りの人が、グループホームに入って2年たつが、心配なことや不安なことがあっても、スタッフが相談に乗ってくれたり、面倒な手続きなどに同行してくれたりするので、安心して生活できること、テレビを見るのが楽しみなことを話してくれました。そして退院促進事業という制度が始まり、病院の精神保健福祉士だけではなく、生活支援センターに退院促進を専門に担当する「自立支援員」という人がいてサポートをしてくれるという説明を聞きました。スムゾーさんは、もしかしたら自分も退院できるのではと思い始めました。精神保健福祉士に相談したところ、やってみようと言われました。



✧ 地域移行支援事業を利用してみると……

病院は、ケア会議というものを開いてくれて、スムゾーさんの意向を聞いてくれました。そのうえで自立支援員を紹介してくれました。

問題は家族の反対です。面会は年に何回かしているものの、その後退院の話はしたことはありません。前任の精神保健福祉士が数年前に退院のことを家族に話したところ、とんでもないと怒られたそうです。ところが反対していた弟が面会に来て、自宅には無理だけれど、どこか退院先を一緒にみつめようと言ってくれたのです。どうして気が変わったのだろうかとわけを聞くと、自立支援員と精神保健福祉士が弟の家まで来て、病気や社会復帰についての詳しい話や、今後何かあったら家族だけではなく周囲の人たちが協力することを約束してくれたそうです。弟は、病弱な子どもを抱え、リストラされたりして苦勞したそうです。そんな時期にスムゾーさんのことを考える余裕などなかったのですが、今は子どもも健康になり、安定した仕事でがんばっているとのことでした。

✧ 退院して地域での生活となりました

その後、毎日のように自立支援員と退院先を探し、隣市にあるグループホームに入ることができました。弟は保証人にもなってくれています。

今では、スムゾーさんは、近くのパンを焼いている福祉サービス事業所に勤めています。数か月たち、そこで知り合った人たちが、ときどき部屋に遊びに来てくれるようになりました。友達を自分の部屋に呼ぶなんて、入院中は考えてもみなかったことです。来月はグループホームのみんな温泉に旅行に行くことが決まり、楽しみにしています。もちろん家族である弟も、スムゾーさんの部屋に遊びに来ます。